

## 第26回群馬緩和医療研究会

日 時：平成 24 年 9 月 23 日 (日) 13:00~16:00  
会 場：岩櫃ふれあいの郷 東吾妻町コンベンションホール「ふれあいの館」  
テ ー マ：「看取りを変える～緩和ケア病棟, 在宅の智慧から学ぶ」  
当番世話人：笹本 肇 (原町赤十字病院 外科)  
共 催：群馬緩和医療研究会 ヤンセンファーマ株式会社

### 〈一般演題〉

#### セッション 1 口演

#### 1. 純粋オキシコドン注射剤(オキファスト®)の登場により今後予測される治療の変化について

高橋 有我, 小林 剛, 斎藤 龍生  
(独立行政法人国立病院機構 西群馬病院  
緩和ケア科)

【はじめに】 従来, オキシコドン徐放性錠剤 (以下, オキシコンチン®) を内服していた患者が内服困難となった場合, 他のオピオイドへのローテーション (以下, OR) を余儀なくされていた。しかし, 純粋オキシコドン注射剤 (以下, オキファスト®) の登場により, 今後, 不要な OR を行わずに済むようになると予測される。今回, 我々はオキシコンチン®を内服していた症例において, 現在までに OR でどのような問題が生じたか検討し, 今後予測される治療の変化について考察した。【対象・方法】 平成 23 年 6 月 1 日より平成 24 年 5 月 31 日までの期間で当院緩和ケア病棟に入院しオキシコンチン®を内服していた 45 例について, OR の有無やその理由, OR 後の問題点について検討した。【結果】 OR を行ったのは 34 例 (75.6%) で, 理由としては終末期による内服困難が 26 例 (76.5%) と最も多かった。OR 後の薬剤としてはモルヒネが 21 例 (61.8%), フェンタニルが 13 例 (38.2%) であった。OR 後に問題があったのは, モルヒネ持続皮下注に変更後, 増量した際にせん妄が生じた 1 例 (2.9%) のみであった。【考察・まとめ】 OR により問題が生じることはほとんど無かった (97.1%) が, オキファスト®の登場により不要な OR がなくなり, さらに安全な治療が可能になると思われる。今回の症例においては OR を行った 34 例のうち 30 例 (88.2%) が OR を行わずにオキファスト®への変更が可能であった。しかし, 呼吸器症状のある患者や高用量のオキシコンチン®を内服している患者は今後もモルヒネやフェンタニルへの OR が必要

になると思われる。理由として咳嗽や呼吸困難の場合はモルヒネの使用が優先されることや, オキファスト®にはモルヒネのような高濃度の注射製剤がないことが挙げられる。オキファスト®の使用例も含め発表する。

#### 2. がん性疼痛緩和目的の持続皮下注射のマニュアルと患者用パンフレットの作成と安全な実施

南本るみ子, 飯塚さち子, 松田 智恵  
熊谷有希子, 村上 廣野, 金澤かるみ  
長岡 優子, 黒岩 宏美, 中沢まゆみ  
羽鳥裕美子, 徳淵真由美, 塩田麻希子  
(独立行政法人国立病院機構  
高崎総合医療センター 緩和ケアチーム)

【はじめに】 持続皮下注射実施に関わる医療者に対し, マニュアルの使用前後のアンケートと, 患者・家族にパンフレット使用後のアンケート調査を実施した。これらのアンケート結果をもとにマニュアル, パンフレットが患者・家族に有用であったかを報告する。【方法】 調査研究: マニュアル (医療者) 実施前後アンケート調査, 患者・家族パンフレット使用 24 時間後アンケート調査。対象: 持続皮下注射実施時に対応した医師・看護師 9 名と対象患者・家族 7 名。期間: 平成 24 年 1 月~平成 24 年 6 月。倫理的配慮: 院内倫理委員会で承認され看護師・患者・家族の承諾を頂いた。【結果・考察】 医療者へのアンケート結果を持続皮下注射実施前後で比較すると目的が明確となり必要物品, 刺入部位, 固定方法, 観察項目, 留意事項などの知識や技術の理解が深まった。マニュアルを使用することで医療者が手順を統一して実施することができ安全な実施につながったという結果が示された。また, 医療者のアンケートから刺入部の固定やルート事故除去予防に対する不安がきかれたため, 安全なルート管理や刺入部の固定についての改善策を立てマニュアルを修正していく必要がある。患者及び家族のアンケートからは注射実施のイメージができ不安が緩和されたという意見がみられた。トラブル無く実施されたこ

とにより、医療者および患者家族に有用であったことが示唆された。調査結果をもとにマニュアルやパンフレットの修正を行い統一した手順で実施でき、患者家族が不安なく持続皮下注射を受けられ、安全に実施されるように今後も取り組んでいきたいと考える。

### 3. 入院患者におけるオピオイド・レスキュー自己管理開始から 6 年目の評価

春山 幸子,<sup>1</sup> 久保ひかり,<sup>1</sup> 土屋 道代<sup>2</sup>

須藤 弥生,<sup>1,2</sup> 小見 雄介,<sup>1,2</sup> 岩田かをる<sup>1</sup>

小保方 馨,<sup>1</sup> 佐藤 浩二,<sup>1</sup> 阿部 毅彦<sup>1</sup>

(1 前橋赤十字病院 かんわ支援チーム

2 前橋赤十字病院 薬剤部)

【はじめに】平成 18 年に麻薬管理マニュアルが一部改正され、入院患者が必要最小限の医療用麻薬を自己管理できることになった。当院でも患者自己管理にあたっての基準を設け、翌年より 1 回分のオピオイド速放製剤(以下、レスキュー)の患者自己管理を開始した。今回、レスキュー自己管理開始から 5 年が経過し、レスキュー自己管理についての評価を行ったので報告する。【対象と方法】がん患者が多く入院する病棟の看護師を対象にアンケート調査を実施し、分析を行った。アンケート実施にあたり、調査の主旨を説明し同意を得ている。【結果】看護師 206 名に配布し 127 名より回答があった(回収率 63.9%)。レスキュー自己管理方法について「知っている」94.8%、「知らない」5.2%。誰から自己管理について聞いたか、は「緩和ケアリンクナースから」が 53.8%、「かんわ支援チームから」が 26.4%。レスキュー自己管理における基準を知っているか、は「知っている」35.4%、「やや知っている」52.8%。レスキュー自己管理における手順を知っているか、は「知っている」33.2%、「やや知っている」47.5%。レスキュー自己管理は患者の疼痛コントロールに有効な方法と思うか、は「とてもそう思う」63.7%、「ややそう思う」34.6%。看護業務の軽減になるか「とてもそう思う」8.5%、「ややそう思う」48.4%、「どちらでもない」30.9%。レスキュー自己管理は今後も継続していくべきか、は「とてもそう思う」45.5%、「ややそう思う」47.7%であった。レスキュー自己管理における不安や懸念内容としては、多い順に患者自身の紛失、盗難、誤投与であった。【結語】レスキュー自己管理方法があることをほとんどの看護師が知っていた。看護師は、レスキュー自己管理について患者の疼痛コントロールに有効な方法であると捉えていることが分かった。レスキュー自己管理を行う際の基準や手順について知っていると答えた看護師は約 30%であり、改めて啓蒙を行っていく必要があることが分かった。今後もレスキュー自己管理への環境を整備し、継続していきたいと考える。

## セッション 2 口演

### 4. 「がん医療に携わる医師のためのコミュニケーション技術研修会」の群馬県個別開催

田中 俊行,<sup>1,2</sup> 間島 竹彦,<sup>3</sup> 小保方 馨<sup>2</sup>

小林 剛,<sup>3</sup> 藤平 和吉,<sup>4</sup> 大庭 章<sup>5</sup>

(1 独立行政法人国立病院機構 高崎総合医療センター

2 前橋赤十字病院

3 独立行政法人国立病院機構 西群馬病院

4 群馬大院・医・神経精神医学

5 県立がんセンター)

厚生労働省委託事業として始まった「がん医療に携わる医師のためのコミュニケーション技術研修会 (CST)」は、現在、全国規模のほか地方でも開催されている。2010 年 3 月、当研究会で CST 個別開催の試みを発表した。その後、2010 年から 2012 年の 3 年間で、前橋赤十字病院と群馬県でそれぞれ 3 回ずつ開催したが、参加する医師の確保が問題点として浮上している。【目的と対象】無記名アンケートにより、群馬県の医師で CST の全国開催に参加した 12 名と個別開催(地方開催)に参加した 36 名、合計 48 名を対象に、研修会参加に対する意識調査をした。【方法】アンケート内容は 2010 年の発表と同様に、1) 充実した研修会で満足するものであったか、2) 今後、職場の医師に参加を勧めるか、3) ファシリテーターは面識のある人でいいか、4) 面識ある参加者が同じグループでいいか、の 4 問とした。①医師年数で 10 年以下の群(A 群: 23 名)と 11 年以上の群(B 群: 25 名)、②参加意思について、自分の意思で参加した群(C 群: 31 名)と上司(同僚)に言われて参加した群(D 群: 17 名)に分けそれぞれ検討した。【結果】①年数別では、両群とも研修会に満足していた(A vs. B: 100% vs. 96%)だが、10 年以下の群のほうがすごく満足していた(78% vs. 56%)。また、10 年以下の群のほうが、ファシリテーターは面識のある人のほうがいいと回答していた(44% vs. 28%)。参加者同士の面識については、両群間に明らかな差はなかった。②参加意思別では、両群とも研修会に満足していたが、自分の意思で参加した群のほうがすごく満足し(C vs. D: 74% vs. 53%)、積極的に職場の医師に参加を勧める(55% vs. 18%)と回答した。また、自分の意思で参加した群のほうが、ファシリテーターは面識がある人のほうがいいと回答(41% vs. 24%)した。【結語】比較的医師年数が若く自分の意思で参加した医師は、研修会に対し満足度が高く、積極的に他の医師に参加を勧める傾向にあった。個別開催に参加する医師確保のための参考の一つになり得ると考える。